

オオモズにおける越冬生態の基礎的観察

唐景文¹・劉伯文²

1 吉林市森林病虫害防治ステーション

2 東北林業大学

訳 福井和二

オオモズ (*Lanius excubito*) は我が国では冬鳥である。オオモズの冬季の生態に関する報告はまだ見られない、よって筆者は1984~1989年の間、吉林地区で、この鳥の越冬生態の観察を行なった。

1. 観察方法

定点追跡調査、この鳥は個体数が非常に少なく、越冬時期、渡りの時期共に見つけることは容易でない。ルート内で発見された越冬期の2羽オオモズ生息場所の最も近い距離は約7 km、この鳥の食性と食物量によって、このように大きな面積を占有しなければ、とても需要を満たすことはできないだろう。これによって、定点追跡観察方法を採用し、この鳥の生息地を発見した永吉県大崗子林場、蛟河県松江保護ステーションおよび市街地の歙喜郷等に越冬生態の観察定点を定め、これらの越冬個体を観察した。

2. 渡り

オオモズの渡来は10月15日~19日、渡去は3月28日~4月7日で、渡りのピークは10月下旬、春、渡去のピークは明確でなかった。勿論、渡りあるいは越冬の期間を通して2羽以上の群れを見ることはなく、ほとんどが1羽の単独行動であった。

3. 生息環境

オオモズは好んで標高200~300mの低山帯、傾斜の緩やかな疎林に生息している。その環境の植被はクスドイゲ *Xylosma japonicum* が多い二次林で、ハシバミ *Corylus heterophylla*、ヤマハギ *Lespedeza bicolor* などと芽生えて間もない、若木の灌木林、草本類で構成され、風の当たらない日向で、生息に便利な特徴を備えている。その他、果樹園、植林された針葉樹林でも見かけることがある。

オオモズは比較的容易に接近することができ、人に対して警戒心が少なく、留まっている樹木のすぐ下まで接近しても逃げようとしなない。

4. 種間関係

オオモズの渡りの時期は他の鳥、たとえば、ベニヒワ (*Carduelis thibetana*)¹、オオマシコ (*Carpodacus trifasciatus*)² 等の渡来時期と一致しており、ベニヒワの多く渡来する年は、オオモズの渡来数も明らかに増加する。越冬期においてはオナガ (*Cyanopicus cyana*) と密接な関係がある。オナガの群の中に、体型、羽色ともに似ているオオモズが混在しているのをよく見かける。それによってオオモズは獲物の貯蔵行動に支障があると思われるが、両者が争うのを見たことがない。

5. 捕食行動

オオモズの食性、観察によりわかったことは越冬期間すべての食物が小型脊椎動物であった(表参照)。

捕食方法

1. 密やかな捕食： 冬、枯れ葉のまま残っているクスドイゲ等の広葉落葉樹や針葉樹に隠

れて、静かに獲物に接近し、突然襲いかかる。

2. 急降下攻撃捕食；高いところから、低いところにいる獲物に向かって急降下して捕食する。急降下に至る前、まず翼を膨らませてから滑空に入る。滑空時尾を上には挙げ、翼を下に下げ、嘴で獲物を攻撃する。もし、失敗すれば、近くの枝まで逃げる獲物を捕捉して、一層敏速に飛びかかる。

3. 追跡捕食；開けた地域では、先に追いかけた鳥の群れから離れた1羽を、最後まで追いかける。既に樹に止まっているスズメも捕獲することができる。

4. ぶら下がり捕食；松杉林内では松葉が混んでいて近寄れない場所では、ぶら下がり飛翔方法で獲物を探す。(主にキクイタダキ、シジュウカラに対して)。

捕食のピークは午前8～10時、午後14～16時の間であった。捕食を行なわない時間は、高い枝の上か、電線に止まって長い間動かないことが多かった。

採食する時、まず、獲物を取るのに都合の良いところで(ときには足の爪でまだ生きている鳥を掴み)殺したのち、羽毛を抜き去り、樹の枝のY字の部分に引っ掛け、嘴で獲物を引き裂いて食べ、もし、獲物がしっかりと枝に架かっていない場合は、何回も架け直して食べ続ける。食べた後はタカ類の食後残渣よりもきれいで、残すものがない。オオモズは食物を樹枝上に架けるので、いたる所に血痕を見ることができる。獲物を食べているとき、もしも、外敵が近づいたら、通常獲物を持って逃げるが、間に合わないとき、あるいは、枝に挟んだ獲物はずすことができない場合、あるいは、獲物が大き過ぎて持って逃げられない場合、既に近くの樹の茂みの中に隠しておき、危険が無くなったら急いで戻り食べる。記憶力が良く、なんと、食べかけのオオモズが、100mほども遠くに、新しい獲物を探しに出掛け、戻って来て、また獲物を探し出して食べる。特に食欲旺盛で、ときには、人が2 mまで近づいても食べ続けていることもある。

食物が比較的充足しているのは10～11月の間で、オオモズの食物の残骸が干からびて枝に引っかけてあるのをよく見かけるが、再びこれを食べているところを見たことがない。

飼育下では、体重約20gの小鳥を、毎日1～2羽食べた。

6. 討論

1. 観察したオオモズの冬季の生息地は基本的に固定している。もし、この生息環境中のオオモズを捕獲したら、しばらくすると他の個体が、この生息地へ現れる。しかし、同一の場所に、同種の個体を見ることはない。

2. 樹の枝に獲物を引っかけて食べる方法はモズ科鳥類固有の採食方法である。観察したオオモズも上手に両足で獲物を枝に止め、引き裂いて食べた。オオモズの体力、脚、爪の力は、タカ類より強いとは見られず、そのため、固定しにくい獲物は必ず樹の枝に引っかける方法をとる。この採食方法は力を省くための適応であると分析した。

3. オオモズは優れた捕食能力を備えるが、捕食成功率から見て、その能力はタカ類に及ぶところではない。1羽の丈夫な小鳥を捕獲するのは容易なことではなく、捕食されるのは体力が弱っていて、反応が緩慢な個体が多い。これは捕食対象個体群の健康に対して、ある程度積極的な関係がある。オオモズの数は少ないので、被捕食群に対する影響は大きくない。

オオモズの冬季における食性分析表

科名	No	種類	捕捉回数	捕捉頻度	捕獲回数	捕獲率	鳥獣比率	総捕獲率
キツキ科	1	コアカゲラ <i>Dendrocopos minor</i>	1	1.1				
ヒタキ科	2	ツグミ <i>Turdus naumanni</i>	1	1.1		14.3	76.9	15.73
	3	キクイタダキ <i>Regulus regulus</i>	2	2.3	1			
シジュウカラ科	4	シジュウカラ <i>Parus major</i>	3	3.4	1			
	5	ハシブトガラ <i>P. palustris</i>	1	1.1				
	6	エナガ <i>Aegithalos caudatus</i>	4	4.5				
ゴジュウカラ科	7	ゴジュウカラ <i>Sitta europaea</i>	1	1.1		28.5		
ハタオリドリ科	8	スズメ <i>Passer montanus</i>	19	21.4	4			
アトリ科	9	マヒワ <i>Carduelis spinus</i>	1	1.1		50.0	76.9	15.73
	10	カワラヒワ <i>C. sinica</i>	1	1.1				
	11	ベニヒワ <i>C. flammea</i> ¹	23	25.9	2			
	12	オオマシコ <i>Carpodacus roseus</i> ²	10	11.2	1			
	13	ベニマシコ <i>Uragus sibiricus</i>	3	3.4	1			
	14	ウソ <i>Pyrrhula pyrrhula</i>	1	1.1				
	15	シメ <i>Coccothraustes coccothraustes</i>						
	16	ホオジロ <i>Emberiza cioides</i>	7	7.9	1			
	17	カシラダカ <i>E. rustica</i>	9	10.1	1			
	18	シベリアジュリン <i>E. pallasi</i>	1	1.1				
ヤチネズミ科	19	ヤチネズミ <i>Clethrionomys rufocanus</i>	1	1.1	1	7.2	23.1	
合計			89	100	14	100%	100%	

*シメの捕捉は見かけなかったが、シメは特にオオモズを恐れ警戒していた。よって、表に掲載した。

訳注

- *1 白腰朱頂雀 (*Carduelis thibetana*) ; 白腰朱頂雀の和名はベニヒワであるが学名は *Acanthis flammea* で、ヒワ属には *Carduelis thibetana* なる学名は見あらず、学名 *Serinum thibetana* は和名チベットヒワ (チベット地方にのみ分布) で、何かの間違いか。
- *2 北朱雀 (*Carpodacus trifasciatus*) ; 北朱雀はオオマシコであるが学名は *C. roseus* で、*Carpodacus trifasciatus* は斑翅朱雀の学名であり、和名はミスジマシコ (チベット、貴州、陝西などに分布する)、東北地方に分布することはないので学名の間違いと思われる。